【書　評】

鳥越皓之著
『自然の神と環境民俗学』

岩田書院　2017年12月

加藤　秀雄

本書は、自然を対象とする環境民俗学の立場から「自然の神」について論じたものである。著者は「自然の神とは自然そのもののシンボル」であると定義し、自然と向き合いながら生活を営んできた農民や漁民が、どのようにそのシンボルである神々に働きかけてきたのかということに注目しながら、それを13の章に分けて考察している。以下、まずは本書の内容を確認しておきたい。

本書は4部構成をとっており、第Ⅰ部「民俗学にとって環境とは」の第1章「環境と民俗学」で、民俗学とエコロジー論を比較しながら、「人間が関与しない完結した自然を守る」ことを目指す後者の立場を批判し、自然に対する人々の働きかけや付きあい方に注目する民俗学の立場を積極的に評価する。ここでは、自然と生活を分断せずに考察する本書の意図が明確に示されているといえよう。

つづく第Ⅱ部「山の神・水の神・風の神・雷神」の導入である第2章「自然の神々とはどのような神だろうか」では、人間が自然とコミュニケーションを図る回路として「自然の神」を作り出したことが、宮城県刈田郡七ヶ宿町の水分神社の祭神をとおして確認され、以後の章で農業と深く関わる山、水、風、雷などの神の考察を行うことが示される。

第3章「山の神と祖霊」では、従来の民俗学における「山の神＝祖霊」とする仮説が、研究史の整理と具体的な事例によって批判的に検討される。著者は、「山の神と祖霊とはなんらかの強い関係があることはあきらかだが、イコールで結びつけられる資料は存在しない」と述べる（42頁）。その上で、水、風、雷などの自然神は、さらに祖霊と遠い存在であるとし、それと人々がどう向き合い、コントロールしようとしてきたのかという課題が示される。

これを受けて第4章「水の神の正体」では、水神の「豊富に水を供給すること」「水害を避けること」という2つの役割に注目し、具体的にどのような神なのかが、日本と中国の事例をとおして検討される。そこで浮かび上がってくるのは、水の神が上記のような役割から外れた機能（安産や健康、幸福の願いを聞き入れる）を持つことがあるという点であり、これらの機能が山の神や先祖神の機能と連続性を持つ点が指摘される。これが本章で示される「水の神の正体」である。

第5章「風の神と風の三郎」では、諏訪信仰と深く関わる風の神が、「風の三郎」という存在といかなる関係を持つのかという点が考察される。農業において強風は大きな被害をもたらすが、これを「風の三郎社」として祀る例が甲信越地方を中心に多数見受けられる。著者は風の神の擬人化である「風の三郎」の正体に関する説をいくつか紹介し、自らの仮説として一定の蓋然性を持つ「甲賀三郎説」を提示する。

第6章「雷神と天祭」は、関東平野に見られる雷神信仰を取り上げ、雷が雨をもたらすものであることから農民に信仰されてきたことを、まず確認する。その上で雷神と天神の関係を検討するが、両者は深いつながりを持ちつつも、完全にイコールとは言えないとし、他の自然神と比較した場合、雷神の性格には不明瞭さが残る点が指摘される。

第7章「樹霊と丸木舟」では、トカラ列島中之島の丸木舟の製作過程で行われる儀礼をとおして、「木の神」の性格をめぐる分析が行われる。人々は丸木舟を製作する際に、樹霊＝木の神に伐採の許可を得るが、こうした木の神に対する儀礼や信仰は、成木責めやキジムナー（※本書ではキムジナーと表記されている）、榎木大明神など他地域の事例でも確認される。そこには山の神とは区別される樹霊の存在が看取されると著者は論じている。

第Ⅲ部「山への信仰と花見」は、自然神に「花」を捧げる考えが広く見られることを取っ掛かりとし、桜を典型とする植樹と信仰の関係、そして花見文化への展開というテーマが議論される。第8章「桜花への関心」では、吉野山の桜を事例としながら、花を捧げる文化が植樹の文化に転化したことが示される。山には水源地があり、山の神は農業に不可欠な水をもたらす存在でもあるが、この神に花を捧げる文化が、桜の植樹に転化したのである。そして桜

の開花は農事の開始を告げるものであり、ここにも農業と花の深いつながりが見て取れる。さらに本章では桜の植えられる場所が、神の支配下にある土地である点にも注意を促している。

第9章「見るから花見へ」では、「見る」という行為の宗教的意味を確認し、その上で「花見の本来的な意味」について考察がなされている。ここでの議論は、第10章「信仰が花見見物をうながす—吉野山から考える」へと接続され、吉野山が桜の山、そして花見の山になった背景が歴史的に整理される。そして第11章「花見を楽しむ」では、信仰的要素が失われた現代社会の「純粋に花見を楽しむ」文化について、観光地・嵐山、都市・上野の事例をとおして議論がなされている。

第Ⅳ部「信仰世界と実践」の第12章「斎場御嶽を男子禁制の場にできないだろうか」では、現在の斎場御嶽の伝統文化を真の意味で守るために、過去の男子禁制の制度を復活させてはどうかという提案がなされている。このような研究者による「学問の実践」のあり方は、第13章「神の土地と学問の実践」で鹿児島県三島村黒島の事例をとおして詳しい議論がなされている。著者は黒島の「未使用地＝神地」が行政や開発業者の管理下に入ることによって、環境破壊が進み、地域の自律性が損なわれていく過程を描き出した上で、そのような現象に学問はどう対峙すればよいのかということを論じて本書を締めくくっている。

以上が、本書の全体の構成である。これらは「自然神の性格」（第Ⅱ部）、「自然と人の関わり方の変遷」（第Ⅲ部）、そして「民俗学のスタンス」（第Ⅰ部、第Ⅳ部）というテーマに分類できるだろう。民俗学は対象の「歴史」を描くことで、その性質を明らかにすることを目的にしてきたが、同時に社会に対する実践性を強く求められる学問である。著者は『柳田民俗学のフィロソフィー』（東京大学出版会、2002）で、自らの民俗学理解を明確に打ち出しているが、本書は、著者の考える民俗学の研究実践を具体的に示したものと言えるだろう。特に第13章は、著者の民俗学に対する考えが色濃く反映しているが、それは「近代」という時代状況の中で人々と自然（神）の関係が変質し、外部への依存度を増す中で、いかにその自律性を担保するかという問題意識が通底している。

このような外部依存の体質を脱却し、自律性を持った地域社会を作っていくことは、現代社会における重要な課題である。そしてその自律性は、人々と自然の関係性を回復することによって得られると評者は考えるが、そのような意味でも本書が示す人と自然（神）の関わり方は、私たちに大きな示唆を与えてくれる。

ここで更なる議論の深化を促すために、本書に対する評者の疑問点を示しておきたい。本書に収録されている議論の中でも特に紙数が割かれているのは、第Ⅱ部の「自然神の性格」についてであるが、著者は様々な事例を参照しながら、従来の自然神をめぐる仮説を再検討し、自分なりの位置づけを導き出すことを試みている。特に第3章に見られるように祖霊一元論的な自然神理解への批判が本書のハイライトの一つとなっているが、著者自身が本書で示しているように、自然神の多義的性格のうちのいずれかを、特定の自然神の「本来の姿」や「正体」とする方法に果たして妥当性があるのか評者には疑問である。むしろその多義性こそが、自然神の「本来の姿」ではないだろうか。ある時は恵みをもたらし、ある時は災いをもたらす自然神の性格は、子孫を見守る／災いをもたらす祖霊の性格とも対応しており（だからといって自然神＝祖霊ではない）、神や霊的存在には、このような両義性が存在する。こうした両義性に由来する自然神の多義的性格を描き出すことの方が、消去法的に神の性格を同定するよりも妥当性を持つように思うがいかがだろうか。

また第4章で「農山村の生活のなかでは、水の神が竜神であるとみなす考えは、わが国には存在しない」と述べられているが（70頁）、このように断言する根拠を示してほしいと感じた。水神を竜や蛇、あるいは鰻などと同一視するケースは、少なからず存在し、例えば宮城県や岩手県の雲南権現などが事例として挙げられる。こうした事例に本書は触れていないが、水神の性格を考える上で基本的な問題であるように思える。

このように本書には、いくつか疑問点も存在するが、著者も述べているように、本書で示されている観点は、あくまでも「今後の研究の進展のための一つのアイディア」である（102頁）。したがって、その妥当性を傍証するにせよ、反証するにせよ、自然神の性格や人と自然（神）の関係を深く考えるための素材が、本書では提供されていると捉えるべきだろう。そのような意味で、本書は自然（神）に対する人々の信仰を研究するための基本文献として、今後、長く読まれていくものとなっていくに違いない。

（成城大学民俗学研究所）